何遜詩訳注（１）

佐伯雅宣 *

Abstract: He Xun (何遜) is a poet of six dynasties. He had excellent literary talent from his early days, and his poetry was highly praised by Shen Yue (沈約), Fan Yun (范雲), and others, it was appreciated very much in those days. I attempt to translate the poetry of He Xun; this report is the first step.

何遜（字は仲言）は、六朝･斉梁代の詩人である。若い頃から詩文に優れ、『梁書』文学上･何遜伝によると、范雲からは、「頃觀文人、質則過儒、麗則傷俗。其能含清濁、中今古、見之何生矣」（頃（このご）ろ文人を觀るに、質なれば則ち儒に過ぎ、麗なれば則ち俗に傷つく。其の能く清濁を含み、今古に中（あた）るは、之を何生に見る）と賞賛され、沈約には「吾毎讀卿詩、一日三復、猶不能已」（吾 卿の詩を読む毎（ごと）に、一日三復するも、猶ほ已む能はず）と称えらるなど、当時の文壇の重鎮たちから高く評価されていた。

一方、梁の武帝蕭衍は「吳均不均、何遜不遜。未若吾有朱异、信則異矣」（吳均は不均、何遜は不遜。未だ吾に朱异の、信に則ち異なる有るに若かず）〔『南史』何遜伝〕と述べており、それほど認めてはいなかったようである。何遜は寒門出身であり、このように武帝からの評価も得られなかったためか、文才はあったもののその生涯は総じて不遇であった。

『梁書』文学上・何遜伝に「初、遜文章與劉孝綽並見重、時謂之何劉」（初、遜の文章　劉孝綽と並びに重んぜられ、時に之を何･劉と謂ふ）というように、当時、何遜は劉孝綽としばしば並び称されていた。『顔氏家訓』文章篇にも「何遜詩實爲清巧、多形似之言。揚都論者、恨其毎病苦辛、饒貧寒氣、不及劉孝綽之雍容也」（何遜の詩 實に清巧 爲（た）り、形似の言多し。揚都の論者、其の毎（つね）に苦辛に病み、貧寒の氣に饒（み）ちて、劉孝綽の雍容たるに及ばざるを恨むなり）とあり、何遜の詩と劉孝綽のそれとが比較して論じられている。

筆者はこれまで劉孝綽の詩を読解してきた（『中国中世文学研究』43 号、『中国古典文学研究』1～5 号、『中国中世文学研究』55 号、『中国古典文学研究』7～8 号、11 号）。今後はこれと比較する意味でも何遜の詩を読んでいくこととする。それによって梁代文学の特質の一端をうかがうことができればと考えている。

なおテキストは呉琯本『詩紀』を底本とし、逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』梁

* 佐伯雅宣：四国大学文学部准教授。

詩、張溥『漢魏六朝百三家集』所収『何記室集』、『玉臺新詠』、『樂府詩集』、『文苑英華』、『藝文類聚』、『初學記』などによって校勘を行った。字句の異同については適宜、語釈に示した。

今回は以下の五首を取り上げる。

１銅雀妓
２輕薄篇
３門有車馬客
４昭君怨
５九日侍宴樂遊苑

１　銅雀妓

『詩紀』巻九十三、『樂府詩集』巻三十一、『藝文類聚』巻三十四、『文苑英華』巻二百四、『何記室集』、梁詩巻八

『藝文類聚』は「銅爵臺詩」に作る。

『樂府詩集』巻三十一「銅雀臺」には、まず『鄴都故事』中の魏武帝の遺命を引く。そこには「吾死之後、葬於鄴之西崗上、與西門豹祠相近。無藏金玉珠寶。餘香可分諸夫人、不命祭吾。妾與伎人、皆著銅雀臺、臺上施六尺牀、下繐帳、朝晡上酒脯粮糒之屬。每月朝十五、輒向帳前作伎。汝等時登臺、望吾西陵墓田」（吾死するの後、鄴の西崗の上、西門豹の祠と相ひ近きに葬れ。金玉珠寶を藏する無かれ。餘香は諸夫人に分かつ可し、吾を祭るを命ぜず。妾と伎人と、皆な銅雀臺に著き、臺上に六尺牀を施し、下に繐帳あり、朝晡に酒脯粮糒の屬を上（たてまつ）れ。每月朝十五には、輒（すなは）ち帳前に向ひて伎を作せ。汝等 時に臺に登り、吾を西陵の墓田に望め）とある。さらに陸機「弔魏武帝文」に、「揮清絃而獨奏、薦脯糒而誰嘗。悼繐帳之冥漠、怨西陵之茫茫。登雀臺而羣悲、佇美目其何望」（清絃を揮して獨奏し、脯糒を薦むるも誰か嘗さん。繐帳の冥漠たるを悼み、西陵の茫茫たるを怨む。雀臺に登りて羣悲し、美目に佇（なが）むるに其れ何をか望まん）とあるのを引く。

これは魏武帝の死後、銅雀臺に残った妓女の様子を詠ったものである。

１	秋風木葉落	秋風　木葉落ち
２	蕭瑟管絃清	蕭瑟として　管絃清し
３	望陵歌對酒	陵を望みて　對酒を歌ひ
４	向帳舞空城	帳に向ひて　空城に舞ふ
５	寂寂簷宇曠	寂寂として　簷宇（ひろ）曠く
６	飄飄帷幔輕	飄飄として　帷幔輕し
７	曲終相顧起	曲終りて　相ひ顧みて起てば

8　日暮松柏聲　　日暮れて　松柏の聲あり

《和訳》

1　秋風が吹いて木の葉が散り
2　管弦の音が清らかにもの寂しく響き渡る
3　墓陵を眺めては、「対酒」を歌い
4　誰もいない城の中、帳に向かって舞っている
5　もの寂しく静かな部屋は広くがらんとしており
6　ひらひらと帳が軽やかにひるがえっている。
7　曲が終わって、立ち上がり振り返ってみても
8　夕暮れ時、松柏に風が吹き付ける音が聞こえるだけなのだ

《語釈》

１秋風木葉落　２蕭瑟管絃清

＊「管絃」、『藝文』は「絃管」に作る。

［秋風木葉落］秋風が吹いて木の葉が散る。『楚辭』九歌・湘夫人に「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下」（嫋嫋たる秋風、洞庭波たち木葉下る）とあるのに基づく。

［蕭瑟］もの寂しいさま。『楚辭』九辯に「悲哉秋之爲氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰」（悲しい哉 秋の氣爲るや、蕭瑟たり 草木 搖落して變衰す）とある。

［管絃］管楽器や弦楽器。音楽。王粲「公讌詩」（『文選』巻二十）に「管絃發徽音、曲度清且悲」（管絃 徽音を發し、曲度りて清らかに且つ悲し）とある。

３望陵歌對酒　４向帳舞空城

［望陵］魏武帝の陵を望む。解題に引く魏武帝の遺命に「汝等時登臺、望吾西陵墓田」（汝等 時に臺に登り、吾を西陵の墓田に望め）とある。また劉孝綽「銅雀妓」（『古詩紀』巻九十七）に「誰言留客袂、還掩望陵悲」（誰か言（ここ）に留客の袂もて、還た望陵の悲しみを掩（おほ）はん）とある。

［對酒］酒に向かう。魏武帝「短歌行」（『文選』巻二十七）に「對酒當歌、人生幾何」（酒に對して當に歌ふべし、人生幾何ぞ）とあり、おそらくこの詩を指しているのであろう。

［向帳］帳に向かう。解題に引く陸機「弔魏武帝文」に「毎月朝十五、輒向帳前作伎」（毎月朝十五には、輒ち帳前に向ひて妓を作せ）とある。

［空城］誰もいない城。顔延之「還至梁城作」（『文選』巻二十七）に「故國多喬木、空城凝寒雲」（故國に喬木多く、空城に寒雲凝る）とある。ここでは銅雀臺を指す。

５寂寂簷宇曠　６飄飄帷幔輕

＊「簷」、『文苑』は「庭」に作る。

［寂寂］寂しく静かなさま。秦嘉「贈婦詩」（『玉臺新詠』巻九）に「寂寂獨居、寥寥空室」（寂寂として獨り居る、寥寥たる空室）とある。

［簷宇］のき。ひさし。また部屋を指す。北齊･邢邵「冬日傷志篇」（『古詩紀』巻百十）に「終風激簷宇、餘雪滿條枚」（終風 簷宇に激しく、餘雪 條枚に滿つ）とある。

［飄飄］風に吹かれてひるがえるさま。秦嘉「贈婦詩」（『玉臺新詠』巻九）に「飄飄帷帳、熒熒華燭」（飄飄たる帷帳、熒熒たる華燭）とある。

［帷幔］垂れ幕。とばり。簡文帝蕭綱「和湘東王名士悅傾城詩」（『玉臺新詠』巻七）に「垂絲繞帷幔、落日度房櫳」（垂絲 帷幔を繞り、落日 房櫳に度る）とある。

７曲終相顧起　８日暮松柏聲

［松柏］松や柏。ここでは墓標の意。「古詩十九首」其十三（『文選』巻二十九）に「白楊何蕭蕭、松栢夾廣路」（白楊 何ぞ蕭蕭たる、松栢 廣路を夾む）とあり、李善注に「仲長子昌言曰、古之葬者、松栢梧桐、以識其墳也」（仲長子昌言に曰く、「古の葬は、松栢梧桐、以て其の墳を識すなり」と）という。

２輕薄篇

『詩紀』巻九十三、『樂府詩集』巻六十七、『玉臺新詠』巻五、『文苑英華』百九十四、『藝文類聚』巻三十三（億、飾、植、息、直、側、食七韻）、同巻四十二（億、飾、側、食、織、色六韻）、『何記室集』、梁詩巻八

『玉臺』、『藝文』三十三、梁詩は「擬輕薄篇」に作る。

『樂府詩集』巻六十七に引く『樂府解題』には「輕薄篇、言乘肥馬、衣輕裘、馳逐經過爲樂。與少年行同意。何遜云城東美少年、張正見云洛陽美少年是也」（輕薄篇は、肥馬に乘り、輕裘を衣、馳逐經過して樂しみを爲すを言ふ。少年行と意を同じくす。何遜に「城東の美少年」と云ひ、張正見に「洛陽の美少年」と云ふは是なり）とある。

これは町中で遊び戯れる貴族の若者の様子を詠ったものである。

１	城東美少年	城東の美少年
２	重身輕萬億	身を重んじ　萬億を輕んず
３	柘彈隨珠丸	柘彈　隨珠の丸
４	白馬黃金飾	白馬　黃金の飾

5 長安九逵上　　長安　九逵の上
6 青槐蔭道植　　青槐　道を蔭(おほ)ひて植(う)う
7 轂擊晨已喧　　轂擊　晨に已に喧(かまびす)しく
8 肩排暝不息　　肩排　暝(くれ)に息まず
9 走狗通西望　　走狗　西に通じて望み
10 牽牛亘南直　　牽牛　南に亘りて直し
11 相期百戲傍　　相ひ期す　百戲の傍
12 去來三市側　　去來す　三市の側
13 象牀沓繡被　　象牀　繡被を沓(ふ)み
14 玉盤傳綺食　　玉盤　綺食を傳ふ
15 倡女掩歌扇　　倡女　歌扇を掩ひ
16 小婦開簾織　　小婦　簾を開きて織る
17 相看獨隱笑　　相ひ看て　獨り笑を隱し
18 見人還斂色　　人を見て　還(ま)た色を斂(をさ)む
19 黃鵠悲故羣　　黃鵠　故羣を悲しみ
20 山枝詠新識　　山枝　新識を詠ず
21 烏飛過客盡　　烏 飛びて　過客 盡(つ)き
22 雀聚行龍匿　　雀 聚(あつ)まりて　行龍 匿(かく)る
23 酌羽方厭厭　　羽を酌みて　方に厭厭たり
24 此時懽未極　　此の時　懽　未だ極まらず

《和訳》

1 町の東の美少年は
2 自身の楽しみを重んじて、万億の金をも惜しまない
3 ヤマグワの弓に隨侯の珠を弾にし
4 白馬に黃金の飾りをつけている
5 長安の大通りには
6 青い槐が道をおおって植えられている
7 車の轂がぶつかりあう音は朝から騒がしく
8 肩が触れあうほどの雑踏は夕方になってもおさまらない
9 走狗台は西の方に望み
10 牽牛橋は南に向かってまっすぐ伸びている
11 遊戯場の傍らで友と出会い
12 三市のあたりを行ったり来たり
13 （妓楼に行き）象牙の寝台、刺繍の布団の上に座っていると
14 玉の大皿に素晴らしい食事が運ばれる
15 歌妓は歌扇で顔をおおい
16 少女は簾をあげて機織りをしている

17 こちらを見ては、ひとり笑って口元を隠し
18 人を見ては、また顔色をすましてしまう
19 「黄鵠」を歌っては、昔の恋人をしのび、
20 「山枝」の歌で、新たに知った恋人を詠う
21 やがて烏も飛び去って、通りに人もいなくなり
22 雀が集まってきて、日も暮れていく頃
23 羽のついた杯に酒を酌んで、ちょうどくつろいでいる
24 今この時、まだまだ楽しみは極まっていない（これからだ）

《語釈》

１城東美少年　２重身輕萬億

＊「城東」、『藝文』四十二は「長安」に作る。「少年」、『藝文』四十二は「年少」に作る。

［美少年］美しい少年。何遜「學古三首」其一（『詩紀』巻九十三）に「長安美少年、羽騎暮連翩」（長安の美少年、羽騎 暮に連翩たり）とある。また近代西曲歌五首･石城樂（『玉臺新詠』巻十）に「城中美年少、出入見依投」（城中の美年少、出入に依投せらる）とある。

［重身］自分自身を大切にする。ここでは自分の楽しみを大切にすることか。

［萬億］数の非常に多いことをいう。『毛詩』周頌・豐年に「萬億及秭、爲酒爲醴」（萬億及び秭、酒を爲り醴を爲る）とあり、毛傳に「數萬至萬曰億」（萬を數へて萬に至るを億と曰ふ）という。

３柘彈隨珠丸　４白馬黃金飾

＊「柘」、『藝文』三十三は「拓」に作る。「飾」、『玉臺』は「勒」に作る。

［柘彈］柘木（ヤマグワ）で作った弾弓。『玉臺新詠』呉兆宜注に引く『古史考』に「柘樹、枝長而勁、烏集之、將飛、柘起彈烏、烏乃號呼。因名烏號弓」（柘樹は、枝長くして勁く、烏 之に集まり、將に飛ばんとするに、柘 起ちて烏を彈き、烏 乃ち號呼す。因りて烏號弓と名づく）とある。

［隨珠丸］隨侯の玉。『淮南子』に基づく。すなわち覽冥訓に「譬如隨侯之珠、和氏之璧、得之者富、失之者貧」（譬へば隨侯の珠、和氏の璧の如く、之を得たる者は富み、之を失ふ者は貧し）とあり、高誘注に「隨侯、漢東之國、姬姓諸侯也。隨侯見大蛇傷斷、以藥傅之。後蛇于江中、銜大珠以報之。因曰隨侯之珠。蓋明月珠也」（隨侯は、漢東の國、姬姓の諸侯なり。隨侯　大蛇の傷斷せらるるを見、藥を以て之に傅す。後 蛇 江中に于いて、大珠を銜み以て之に報ず。因りて隨侯の珠と曰ふ。蓋し明月の珠なり）という。

［白馬黄金飾］この句は曹植「白馬篇」（『文選』巻二十七）に「白馬飾金羈、連翩西北馳」（白馬金羈を飾り、連翩として西北に馳す）とあるのに基づく。その李善注には「古羅敷行曰、青絲繫馬尾、黄金絡馬頭」（古羅敷行に曰く、「青絲 馬尾に繫ぎ、黄金 馬頭に絡ぐ」と）という。

５長安九逵上　６青槐蔭道植

＊「蔭」、『文苑』『藝文』三十三は「陰」に作る。

［九逵］都市の四方に通ずる街路。町の大通り。左思「魏都賦」（『文選』巻六）に「廓三市而開廛、籍平逵而九達」（三市を廓くして廛を開き、平逵の九達に籍る）とある。謝朓「阻雪」（『謝宣城集校注』巻五）に「九逵密如繡、何異遠別離」（九逵 密なること繡の如く、何ぞ遠き別離に異ならんや）とある。

［青槐蔭道植］この句は左思「魏都賦」（『文選』巻六）に「疏通溝以濱路、羅青槐以蔭塗」（通溝を疏して以て路に濱（そ）ひ、青槐を羅ねて以て塗を蔭ふ）とあるのを踏まえる。

７轂擊晨已喧　８肩排暝不息

＊「喧」、『藝文』三十三は「諠」に作る。「排」、『藝文』三十三は「摩」に作る。
「暝」、『文苑』は「冥」に作り、『玉臺』『藝文』三十三は「暗」に作る。

［轂擊］轂（こしき）がぶつかる。車の多いことをいう。『史記』蘇秦列傳に「臨菑之塗、車轂擊、人肩摩、連衽成帷、舉袂成幕」（臨菑の塗、車轂擊ち、人肩摩し、衽を連ねて帷を成し、袂を舉げて幕を成す）とある。また『漢書』嚴安傳に「合從連衡、馳車轂擊」（合從連衡し、車を馳せて轂擊つ）とあり、顔師古注に「車轂相擊、言其衆多也」（車轂相ひ擊つは、其の衆の多きを言ふなり）という。

［肩排］「肩摩」に同じ。人々の肩が互いに押し合うこと。人数の多さ、雑踏をいう。前掲『史記』を参照。

９走狗通西望　10 牽牛亘南直

＊「亘」、『樂府』は「向」に作る。「西」、『文苑』は「四」に作る。

［走狗］台閣の名。『三輔黄圖』巻五に「長樂宮有魚池臺、酒池臺、秦始皇造。又有著室臺、鬥鷄臺、走狗臺、壇臺、漢韓信射臺」（長樂宮に魚池臺、酒池臺有り、秦始皇 造る。又た著室臺、鬥鷄臺、走狗臺、壇臺、漢韓信射臺有り）とある。

［牽牛］橋の名。一名、横橋。『三輔黄圖』巻一に「渭水貫都、以象天漢、横橋南度、以法牽牛」（渭水 都を貫き、以て天漢に象り、横橋 南に度し、以て牽牛に法る）とある。また梁元帝「長安路」（『藝文類聚』巻四十二）に「城形類南斗、橋

勢似牽牛」（城形 南斗に類し、橋勢 牽牛に似たり）とある。

11 相期百戯傍　12 去來三市側

［期］会う。

［百戯］軽業、曲芸などさまざまな雑伎遊戯の総稱。『三國志』魏書・文帝紀注に引く『魏書』に「設伎樂百戯」（伎樂百戯を設く）とある。

［去來］行き来する。

［三市］大市、朝市、夕市の総称。左思「魏都賦」（『文選』巻六）に「廓三市而開廛、籍平逵而九達」（三市を廓くして廛を開き、平逵の九達に籍る）とあり、李善注に「李善注に「周禮、大市、日昃而市、朝市、朝時而市、夕市、日夕而市。此三市之謂也」（周禮に、大市は、日昃きて市し、朝市は、朝時にして市し、夕市は、日夕にして市す。此れ三市の謂なり）という

　おそらくこの二句は、友人と出会い、町中を歩いている様子を言うのであろう。

13 象牀沓繡被　14 玉盤傳綺食

＊「沓」、梁詩は「杳」に作る。

［象牀］象牙でできた寝台。『戰國策』齊策三に「孟嘗君出行國、至楚、獻象牀」（孟嘗君 出でて國に行き、楚に至り、象牀を獻ず）とある。鮑照「代白紵舞歌詞四首」其二（『鮑參軍集注』巻四）に「象牀瑤席鎮犀渠、雕屏合匝組帷舒」（象牀 瑤席 犀渠を鎮（そさ）へ、雕屏 匝匝して 組帷 舒ぶ）とある。

［繡被］刺繡を施した夜着。『漢書』霍光傳に「賜金錢、繒絮、繡被百領」（金錢、繒絮、繡被百領を賜ふ）とある。

［玉盤］玉の皿。美しい皿。張衡「四愁詩四首」其二（『文選』巻二十九）に「美人贈我金琅玕、何以報之雙玉盤」（美人 我に贈る 金琅玕、何を以て之に報ひん 雙玉盤）とあり、李善注に「古詩曰、委身玉盤中、歴年冀見食。應劭漢官儀曰、封禪壇有白玉盤」（古詩に曰く、「身を委つ玉盤の中、年を歴て食されんことを冀ふ」と。應劭漢官儀に曰く、「封禪壇に白玉盤有り」と）という。

［綺食］立派な食事。六朝以前の用例は未見。唐代にはしばしば見られる。李白「扶風豪士歌」（『全唐詩』巻百六十六）に「雕盤綺食會衆客、吳歌趙舞香風吹」（雕盤 綺食 衆客を會し、吳歌 趙舞 香風吹く）とある。

　この二句以降は、友人とともに行った妓楼・酒場などの様子ではないか

15 倡女掩歌扇　16 小婦開簾織

＊「倡女」、『樂府』は「大姊」に作る。「歌扇」、『玉臺』『樂府』『文苑』『藝文』

四十二、及び梁詩は「扇歌」に作る。「婦」、『樂府』は「妹」に作る。

［倡女］倡家の女。「古詩十九首」其二（『文選』巻二十九）に「昔爲倡家女、今爲蕩子婦。蕩子行不歸、空牀難獨守」（昔は倡家の女 爲(た)り、今は蕩子の婦爲り。蕩子 行きて歸らず、空牀 獨り守り難し）とあり、李善注に、「說文曰、倡樂也。謂作妓者。列子曰、有人去鄉土遊於四方而不歸者、世謂之爲狂蕩之人也」（說文に曰く、「倡は樂なり。妓を作す者を謂ふ」と。列子に曰く、「人の鄉土を去り四方に遊びて歸らざる者有り、世 之を謂ひて狂蕩の人と爲すなり」と）いう。

［歌扇］歌妓の持つ扇。顔をおおって歌うためのもの。紀少瑜「擬吳均體應教」（『玉臺新詠』巻八）に「却匣擎歌扇、開箱擇舞衣」（匣を却けて歌扇を 擎(ささ)げ、箱を開きて舞衣を擇ぶ）とある。

なお『詩紀』、『何記室集』以外の各本はすべて「扇歌」に作る。その場合、「倡女 扇を掩ひて歌ひ」となり、対句を考えても妥当であるが、今回は底本に従っておく。

［小婦］もとは楽府古辞「相逢行」や「長安有狹斜行」に基づき、三兄弟の末弟の妻をいう。古辞「相逢行」（『樂府詩集』巻三十四）に「大婦織綺羅、中婦織流黃。小婦無所爲。挾瑟上高堂」（大婦 綺羅を織り、中婦 流黃を織る。小婦 爲す所無く、瑟を挾みて高堂に上る）とある。ただしここでは「倡女」と同じく妓女を指すか。

17 相看獨隱笑　18 見人還斂色

［隱笑］笑いを隱す。口元を覆って笑うことか。

［斂色］顔色をすます。すまし顔。梁元帝「古意詩」（『古詩紀』巻七十一）に「停梭還斂色、何時勸使君」（梭を停めて還た色を斂め、何れの時にか使君に勸めん）とある。

19 黃鵠悲故羣　20 山枝詠新識

＊「鵠」、『玉臺』『樂府』『文苑』梁詩は「鶴」に作る。「新」、『玉臺』は「初」に作る。

［黃鵠］黃色みを帶びた白鳥。あるいはコウノトリ。蘇武「詩四首」其二（『文選』巻二十九）に「黃鵠一遠別、千里顧徘徊。胡馬失其羣、思心常依依」（黃鵠 一たび遠く別れ、千里に顧みて徘徊す。胡馬 其の羣を失ひ、思心 常に依依たり）とある。これは春秋時代、魯の陶嬰の歌に基づく。すなわち『列女傳』貞順傳に「陶嬰者、魯陶門之女也。少寡、養幼孤、無強昆弟、紡績爲産。……其歌曰、悲黃鵠之早寡兮、七年不雙。宛頸獨宿兮、不與衆同。夜半悲鳴兮、想其故雄。……」（陶

嬰なる者は、魯の陶門の女なり。少くして寡なるも、幼孤を養ひ、強昆弟無きも、紡績して産を爲す。……其の歌に曰く、悲し黄鵠の早に寡なる、七年 雙ならず。頸を 宛(まと)げて獨宿し、衆と同にせず。夜半に悲鳴し、其の故雄を想ふ。……）とあり、夫を失った悲しみを歌っている。

［山枝］「越人歌一首」（『玉臺新詠』巻九に「心幾頑而不絶兮、得知王子。山有木兮木有枝、心悅君兮君不知」（心 幾ど頑として絶えず、王子を知るを得たり。山に木有り木に枝有り、心に君を悅ぶも君は知らず）とあるのに基づく。これは楚の顎君子脩が舟に乗った際、その舵取りである越人が顎君を思ってうたった歌（男色の歌）である。

［新識］「新知」に同じ。新たに知る人。新しい友人・恋人をいう。鮑照「詠雙燕」（『玉臺新詠』巻四）に「悲歌辭舊愛、銜泥覓新知」（悲歌して舊愛を辭し、泥を銜みて新知を覓む）とある。また何遜にも例があり、「贈諸遊舊詩」（『詩紀』巻九十三）に「新知雖已樂、舊愛盡暌違」（新知 已に樂しと雖も、舊愛 盡く暌違す）とあり、「劉博士江丞朱從事同顧不値作詩云爾」（『詩紀』巻九十三）に「故人篤久要、新知從暮室」（故人 久要に篤く、新知 暮室に從ふ）とある。

21 烏飛過客盡　22 雀聚行龍匿

＊「烏」、『玉臺』は「鳥」に作る。

［過客］旅人。ここでは通りを行く人。

［行龍匿］ここでは日が暮れる意か。『玉臺新詠』呉兆宜注には「行龍匿、謂薄暮也」（行龍匿るとは、薄暮を謂ふなり）とあり、以下の傅玄の詩と『後漢書』を引く。まず傅玄「日昇歌」に「東光昇朝陽、羲和初攬轡。六龍並騰驤、逸景何晃晃」（東光 朝陽昇り、羲和 初めて轡を攬る。六龍 並びに騰驤し、逸景 何ぞ晃晃たる）とあり、『後漢書』馬援傳に「夫行天莫如龍、行地莫如馬」（夫れ天を行くこと龍に如くは莫く、地を行くこと馬に如くは莫し）とある。龍が日を引くことについては、『初學記』巻一に引く『淮南子』に「爰止羲和、爰息六螭、是謂懸車」（爰に羲和を止め、爰に六螭を息む、是を懸車と謂ふ）とあり、その注に「日乘車、駕以六龍、羲和御之」（日 車に乘り、駕するに六龍を以てし、羲和 之を御す）という。

23 酌羽方厭厭　24 此時懽未極

＊「羽」、『文苑』は「酒」に作る。「方」、『玉臺』は「前」に作る。「未」、『文苑』は「無」に作る。

［酌羽］「羽」は羽觴（羽のついた杯）をいう。班婕妤「自悼賦」（『漢書』本傳）

に「顧左右兮和顔、酌羽觴兮銷憂」（左右を顧みて顔を和ませ、羽觴を酌みて憂を銷す）とあり、劉徳注に「酒行疾如羽也」（酒行 疾きこと羽の如きなり）といい、孟康注に「羽觴、爵也。作生爵形、有頭尾羽翼」（羽觴は、爵なり。生爵の形を作し、頭尾羽翼有り）という。また如淳注に「以瑇瑁覆翠羽於下徹上見」（瑇瑁を以て翠羽を下より覆ひ徹して上に見る）という。

［厭厭］落ち着いているさま。くつろぎ安んずるさま。『毛詩』小雅・湛露に「湛湛露斯、匪陽不晞。厭厭夜飲、不醉無歸」（湛湛たる露は、陽に匪ずんば晞かず。厭厭たる夜飲は、醉はずんば歸る無かれ）とあり、毛傳に「厭厭、安也」（厭厭は、安なり）という。

３門有車馬客

『詩紀』巻九十三、『樂府詩集』巻四十、『文苑英華』百九十五、『何記室集』、梁詩巻八

『樂府詩集』は、作者を「隋何妥」に作る。

『樂府詩集』巻四十に引く『樂府解題』には「曹植等門有車馬客行、皆言問訊其客、或得故舊鄉里、或駕自京師、備敘市朝遷謝、親友凋喪之意也」（曹植等の門有車馬客行は、皆な其の客に問訊するを言ふ。或いは故舊鄉里を得、或いは駕して京師自りし、備に市朝遷謝し、親友凋喪するの意を敘ぶるなり）とある。曹植の作は現存しないが、一方で曹植には「門有萬里客」と題する樂府がある。

これは、門にやって来た旅人から故郷の手紙を受け取ったことを詠ったものである。

1	門有車馬客	門に車馬の客有り
2	言是故鄉來	言ふ 是れ 故鄉より來たると
3	故鄉有書信	故鄉より書信有り
4	縱横印檢開	縱横　印檢開く
5	開書看未極	書を開きて　看るも未だ極まらず
6	行客屢相識	行客　屢（しば）しば相ひ識ると
7	借問故鄉來	故鄉を借問すれば
8	潺湲淚不息	潺湲として　淚　息（や）まずと
9	上言離別久	上に離別の久しきを言ひ
10	下言望應歸	下に應に歸るべきを望まんと言ふ
11	寸心將夜鵠	寸心　夜鵠を將（もつ）て
12	相逐向南飛	相ひ逐ひて南に向ひて飛ばん

《和訳》

1 門に車馬に乗った旅人があり
2 故郷からやって来たと言う
3 故郷から手紙をあずかっており
4 縦横に施された封を開いた
5 書を開いて読んだがまだ読み終わらないうちに
6 その旅人も、しばしば会って（故郷の妻、家族を）知っているという
7 故郷のこと（妻、家族の様子）を尋ねたところ
8 「はらはらと止めどなく涙を流していました」と
9 （手紙には）初めに「長いことあなたと離ればなれです」と言い
10 最後には「帰ってこられる日を待ち望んでいます」とあった
11 我が胸の内を夜の鵠（くぐい）に託し
12 追いかけて南に向かって飛んでいきたいものだ

《語釈》

１門有車馬客　２言是故郷來

＊「有」、『樂府』は「前」に作る。

この二句は、陸機「門有車馬客行」（『文選』巻二十八）に「門有車馬客、駕言發故郷」（門に車馬の客有り、駕して言に故郷を發すと）とあるのを踏まえる。

３故郷有書信　４縦横印檢開

［書信］書簡。手紙。宋の「讀曲歌八十九首」其五十六（『樂府詩集』巻四十六）に「書信了不通、故使風往爾」（書信了（まこと）に通ぜず、故に風をして往かしむるのみ）とある。吳均「閨怨二首」其一（『古詩紀』巻八十二）に「相去三千里、參商書信難」（相ひ去ること三千里、參商 書信難し）とある。

［縦横］縦と横。また交錯するさま。ここでは手紙の封の様子をいう。

［印檢］封印。文書などを封じて印を押すこと。用例未見。『説文解字』木部に「檢、書署也」（檢は、書署なり）とある。

５開書看未極　６行客屢相識

［行客］旅人。門にやって来た者を指す。

［行客屢相識］この句はおそらく、旅人が手紙の送り主（主人公の妻、家族）のことをよく見知っていると言うのであろう。

７借問故郷來　８潺湲涙不息

＊「來」、『樂府』は「人」に作る。

［借問］試みに問う。少し尋ねる。陸機「門有車馬客行」（『文選』巻二十八）に「借問邦族間、惻愴論存亡」（邦族の間を借問すれば、惻愴として存亡を論ず）とある。
［故郷來］「來」は、句末に置いて語勢を整える助辞か。『樂府詩集』は「故郷人」に作るが、その方が解しやすい。
［潺湲］涙の流れるさま。『楚辭』九歌・湘君に「横流涕兮潺湲、隱思君兮陫側」（涕を横流して潺湲たり、君を隱思して陫側たり）とあり、王逸注に「潺湲、流貌」（潺湲は、流るる貌なり）という。
　この七、八句はいささか分かりにくい。ただ第七句「借問」に対する答えが、第八句にあると見るのが妥当であろう。とすればこの二句は、主人公が故郷に残した妻、あるいは家族のことを旅人に問い、旅人はその様子を第八句のようであったと答えたのではないか。

９上言離別久　10 下言望應歸
＊「下言」、『樂府』は「下道」に作る。
［上言…下言］「古詩十九首」其十七（『文選』巻二十九）に「客從遠方來、遺我一書札。上言長相思、下言久離別」（客 遠方從り來たり、我に一書札を遺る。上に長く相ひ思ふと言ひ、下に久しく離別すと言ふ）とあるのを踏まえる。

11 寸心將夜鵠　12 相逐向南飛
＊「鵠」、『樂府』『文苑』は「鵲」に作る。
［寸心］胸の内。心。陸機「文賦」（『文選』巻十七）に「函緜邈於尺素、吐滂沛乎寸心」（緜邈を尺素にみ、滂沛を寸心に吐く）とあり、李善注に「列子、文摯謂叔龍曰、吾見子之心矣、方寸之地虚矣」（列子に、文摯 叔龍に謂ひて曰く、「吾 子の心を見るに、方寸の地虚し」と）という。
［夜鵠］夜のくぐい。孔稚珪「北山移文」（『文選』巻四十三）に「蕙帳空兮夜鵠怨、山人去兮曉猨鳴」（蕙帳 空しくして 夜鵠 怨み、山人 去りて 曉猨 鳴く）とある。
［相逐］追いかける。荀昶「擬青青河邊草」（『玉臺新詠』巻三）に「他邦各異邑、相逐不相及」（他邦 各おの邑を異にし、相ひ逐ふも相ひ及ばず）とある。

４昭君怨

『詩紀』巻九十三、『樂府詩集』巻二十九、『文苑英華』二百四、『何記室集』、梁詩巻八

『樂府詩集』巻二十九は、「明君詞」と題し、作者を「隋何妥」に作る。

これは王昭君の故事に基づく。『西京雜記』巻二に「元帝後宮既多、不得常見。乃使畫工圖形、案圖召幸之。諸宮人皆賂畫工、多者十萬、少者亦不減五萬。獨王嬙不肯、遂不得見。匈奴入朝、求美人爲閼氏。於是上案圖、以昭君行。及去、召見、貌爲後宮第一。善應對、擧止閑雅。帝悔之、而名籍已定。帝重信於外國、故不復更人。乃窮案其事、畫工皆棄市」（元帝の後宮 既に多く、常に見ゆるを得ず。乃ち畫工をして形を圖かしめ、圖を案じて召して之を幸す。諸宮人 皆な畫工に賂し、多き者は十萬、少なき者も亦た五萬を減ぜず。獨り王嬙のみ肯ぜず、遂に見ゆるを得ず。匈奴 入朝し、美人を求めて閼氏と爲さんとす。是に於いて 上 圖を案じ、昭君を以て行かしむ。去るに及び、召見するに、貌は後宮第一爲り。善く應對し、擧止 閑雅なり。帝 之を悔ゆるも、而るに 名籍 已に定まれり。帝 信を外國に重んじ、故に復た人を更めず。乃ち其の事を窮案し、畫工 皆な棄市せらる）とある。なお『樂府詩集』巻二十四「王明君」には、『唐書』楽志を引き、「明君、漢曲也。……漢人憐其遠嫁、爲作此歌」（明君は、漢曲なり。……漢人 其の遠く嫁するを憐れみ、爲に此の歌を作る）という。

この何遜の作は「王昭君」の曲を聞いた人の心情を詠ったものである。

1	昔聞白鶴弄	昔聞く　白鶴弄
2	已自軫離情	已に自ら離情を軫（いた）ましむ
3	今來昭君曲	今來　昭君の曲
4	還悲秋草生	還つて秋草の生ずるを悲しむ

《和訳》

1 昔、白鶴弄の曲を聞いたときは
2 その離別の悲しみに心を傷めていた
3 今、王昭君の曲が流れてきたが
4 今度は秋の草が生えてくることさえ悲しくなってしまうのだ

《語釈》

１昔聞白鶴弄　２已自軫離情

＊「白」、『樂府』『文苑』は「別」に作る。

［白鶴弄］楽曲の名。潘岳「笙賦」（『文選』巻十八）に「爾乃引飛龍、鳴鵾雞、雙鴻翔、白鶴飛」（爾して乃ち飛龍を引き、鵾雞を鳴らし、雙鴻翔り、白鶴飛ぶ）とあり、李善注に「古樂府有飛來雙白鶴篇」（古樂府に飛來雙白鶴篇有り）という。「飛來雙白鶴」と題する楽府は、六朝では梁・元帝、陳・後主に見られ、それは「艶歌何嘗行」（『樂府詩集』巻三十九）に基づくものとされる。その古辞には「飛來

雙白鵠、乃從西北來。十十五五、羅列成行。妻卒被病、行不能相隨。五里一反顧、六里一徘徊。……躇躊顧羣侶、淚下不自知。念與君離別、氣結不能言」（飛び來る雙白鵠、乃ち西北從り來る。十十と五五と、羅列して行を成す。妻 卒に病に被（かか）り、行くに相ひ隨ふ能はず。五里に一たび反顧し、六里に一たび徘徊す。……躇躊して羣侶を顧み、淚下りて自ら知らず。君と離別するを念ひ、氣結ぼれて言ふ能はず）とあり、『樂府解題』には「鵠、一作鶴」といい、『藝文類聚』では「白鶴」に作る。いずれにせよ、離ればなれとなったつがいの白鵠（白鶴）から、男女の別れの哀しみを詠ったものである。

なお『樂府詩集』では「別鶴」に作るが、この場合も「別鶴操」というやはり男女の別離をテーマとした楽曲がある。

［離情］別れの情。任昉「出郡傳舍哭范僕射」（『文選』巻二十三）に「將乖不忍別、欲以遣離情」（將に乖れんとするも別るるに忍びず、以て離情を遣らんと欲す）とある。

［軫］傷む。悲しむ。『楚辭』九章・哀郢に「出國門而軫懷兮、甲之鼂吾以行」（國門を出でて懷ひを軫（いた）ましめ、甲の鼂（あした） 吾 以て行く）とある。

３今來昭君曲　４還悲秋草生

＊「生」、『樂府』『文苑』は「并」に作る。

［今來］今。曹植「情詩」（『文選』巻二十九）に「始出嚴霜結、今來白露晞」（始め出でしとき嚴霜結び、今來 白露晞く）とある。

［昭君曲］楽曲の名。王昭君。解題を参照。

［秋草］秋の草。石崇「王明君詞」（『文選』巻二十七）に「我本漢家子、將適單于庭。……朝華不足歡、甘與秋草并。傳語後世人、遠嫁難爲情」（我は本と漢家の子、將に單于の庭に適がんとす。……朝華 歡ぶに足らず、秋草と并せらるるに甘んず。傳語す後世の人、遠く嫁しては情を爲し難しと）とある。『樂府詩集』『文苑英華』は「秋草并」に作るが、その場合は、この石崇の作を踏まえてのことであろう。

５九日侍宴樂遊苑　　九日 宴に樂遊苑に侍す

『詩紀』巻九十三、『樂府詩集』巻二十九、『文苑英華』巻百七十三、『藝文類聚』巻四（勳、君、分、氛、氳、羣、曛、文九韻）、『初學記』巻四（勳、分、氛、氳、曛、文、芬、汾八韻）、『何記室集』、梁詩巻八

梁詩は「九日侍宴樂游苑詩爲西封侯作」に作り、『詩紀』『何記室集』の題下注には「爲西封侯作」という。『藝文類聚』は「爲西豐侯九日侍宴樂遊苑詩」に作る。『文苑英華』は「九日侍宴」に作り、「一有樂游苑爲西豐侯作八字」という。

「樂遊苑」とは庭園の名。『文選』巻二十には范曄「樂遊應詔詩」があり、李善注に「丹陽郡圖經曰、樂遊苑、宮城北三里、晉時藥園也」（丹陽郡圖經に曰く、「樂遊苑は、宮城の北三里、晉時の藥園なり」と）という。

また梁詩や『詩紀』『何記室集』の題下注は「爲西封侯作」とあるが、おそらく『藝文類聚』の「西豐侯」とすべきであろう。これは梁･武帝蕭衍の甥にあたる臨賀王蕭正德を指す。『梁書』臨賀王正德傳に「及高祖踐極、便希儲貳、後立昭明太子、封正德爲西豐侯、邑五百戶」（高祖の踐極するに及び、便ち儲貳を希ふも、後に昭明太子を立て、正德を封じて西豐侯、邑五百戶と爲す）とある。この詩の制作時期はおそらく天監中（五〇二～五一九）という以外不明であるが、九月九日重陽節の日に、楽遊苑で行われた宴において、西豊侯蕭正德のために彼に代わって作られたものであろう。

なお同題の詩が任昉、丘遲、沈約にあり、その他、劉苞「九日侍宴樂遊苑正陽堂」、梁簡文帝「九日侍皇太子樂遊苑」、庾肩吾「九日侍宴樂遊苑應令」などもあり、重陽節の日にこの樂遊苑でしばしば宴が開かれていたことがうかがえる。

1	皇德無餘讓	皇德　餘讓無く
2	重規襲帝勳	規を重ねて　帝勳を襲ふ
3	垂衣化比屋	衣を垂れて　化　屋を比(なら)べ
4	睠顧愼爲君	睠顧して　愼みて君爲(た)り
5	翩飛悅有道	翩飛　道有るを悅び
6	卉木荷平分	卉木　平分を荷(にな)ふ
7	宸襟動時豫	宸襟　動(やや)もすれば時に豫しみ
8	歲序屬涼氛	歲序　涼氛に屬す
9	城霞旦晃朗	城霞　旦に晃朗たり
10	槐霧曉氤氳	槐霧　曉に氤氳たり
11	鸞輿和八襲	鸞輿　八襲に和し
12	鳳駕啓千羣	鳳駕　千羣を啓く
13	羽觴懽湛露	羽觴　湛露を懽び
14	佾舞奏承雲	佾舞　承雲を奏す
15	禁林終宴晚	禁林　宴を終ふるの晚
16	華池物色曛	華池　物色曛(くら)し
17	疏樹飜高葉	疏樹　高葉を飜(ひるがへ)し
18	寒流聚細紋	寒流　細紋を聚(あつ)む

19 晴軒連瑞氣　　晴軒　瑞氣連なり
20 同惹御香芬　　同(とも)に御香を惹きて芬たり
21 日斜迢遞宇　　日は斜めなり　迢遞たる宇
22 風起嵯峨雲　　風は起こる　嵯峨たる雲
23 運偶參侯服　　運偶　侯服に參じ
24 恩洽廁朝聞　　恩　洽(あまね)く　朝聞に廁(まじ)はる
25 於焉藉多幸　　焉に於いて　多幸に藉(よ)り
26 歲暮仰遊汾　　歲の暮るるまで　遊汾を仰がん

《和訳》

1 天子の恩徳には辞退する余地などない
2 かの堯帝の威光を受け継いでおられる
3 衣を垂らして座っておられるだけで、その教化はあまねく及び
4 自らをかえりみて、慎んで君主たるにふさわしい行いをされる
5 鳥たちも天下に道があることを悦び
6 草木も公平な恩恵をこうむっている
7 天子はいつも季節ごとの楽しみをなされるが
8 この時節はちょうど清涼な秋であった
9 城の上の霞は、朝に明るく広がり
10 槐にかかる霧は、明け方に盛んに立ちこめている
11 帝の鸞輿は、八重の門をおだやかに進み
12 その鳳駕は、群臣の先頭に立って行く
13 羽のついた觴(さかずき)は、豊かな露（恩徳）を受けることを歓び
14 八佾の舞が舞われ、承雲の楽が奏でられる
15 禁苑の林では、宴も終わろうとする夕暮れ
16 美しい池のほとりの景色も薄暗くなった
17 枝葉のまばらな樹では、高いところで葉がひるがえり
18 冷たい川の流れには、小さな波紋が集まっている
19 晴れた空の下の車には、瑞祥の気が立ち昇り連なり
20 ともに芳しい香が染みついてる
21 広く大きな宮殿に日は傾き
22 高い雲には風が吹き渡っている
23 幸運にも、諸侯の服の中に加わり
24 あまねく及ぶ天子の恩を、朝廷にまじって聞くことができた
25 そこでこの多くの幸いをよすがとして
26 年が暮れるまで、この汾水での行幸を仰ぎ見たいものだ

《語釈》

１皇德無餘讓　２重規襲帝勳

＊「餘」、『藝文』は「與」に作る。「襲」、『文苑』は「習」に作る。

［皇德］皇帝の恩德。班固「東都賦・白雉詩」（『文選』巻一）に「彰皇德兮侔周成、永延長兮膺天慶」（皇德を 彰（あらは）すこと周成に 侔（ひと）しく、永く延長して天慶を 膺（う）けん）とある。

［餘讓］辞退して遠慮する余地。用例未見。

［重規］前のものに従い、受け継ぐこと。荀勗「食擧樂東西箱歌十二章」（『宋書』樂志）に「今我聖皇、焜燿前暉。奕世重規、明照九畿」（今 我が聖皇、前暉を焜燿す。世を 奕（かさ）ね規を重ね、九畿を明照す）とある。

［帝勳］帝堯を指す。『尚書』堯典に「帝堯曰放勳」（帝堯は放勳と曰ふ）とあり、馬融注に「放勳、帝堯名」（放勳は、帝堯の名なり）という。

３垂衣化比屋　４睠顧愼爲君

＊「睠顧」、『藝文』は「卷領」に作り、『文苑』は「眷顧」に作る。

［垂衣］衣を垂らす。衣裳をつけて座っているだけで天下が治まること。『周易』繫辭下に「黄帝堯舜垂衣裳而天下治」（黄帝堯舜は衣裳を垂れて天下治まる）とあるのを踏まえる。

［比屋］多くの家々。転じて遍く広いこと。「魏都賦」（『文選』巻六）に「故令斯民睹泰階之平、可比屋而爲一」（故に斯の民をして泰階の平を睹、屋を比べて一と爲す可からしむ）とあり、李善注に「尚書大傳曰、周人可比屋而封」（尚書大傳に曰く、「周人 屋を比べて封ず可し」と）という。

［睠顧］振り向く。かえりみる。班固「兩都賦序」（『文選』巻一）に「西土耆老、咸懷怨思、冀上之睠顧、而盛稱長安舊制、有陋雒邑之議」（西土の耆老、咸な怨思を懷き、上の睠顧を冀ひ、而して盛んに長安の舊制を稱し、雒邑を陋とするの議有り）とある。

［爲君］君主としてふさわしくある。『論語』泰伯に「大哉、堯之爲君也。 巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之」（大なる哉、堯の君爲るや。 巍巍乎として、唯だ天を大なりと爲し、唯だ堯のみ之に則る）とある。

５翾飛悅有道　６卉木荷平分

［翾飛］鳥をいう。『藝文類聚』巻十一に引く『淮南子』に「翾飛蠕動、莫不仰德而生」（翾飛蠕動、德を仰ぎて生ぜざる莫し）とある。何遜「七召」（『何記室集』）に「小大之獄無冤民、翾飛之物無夭姓」（小大の獄 冤民無く、翾飛の物 夭性無し）とある。

［有道］道にかなった政治が行われる。張衡「東京賦」（『文選』巻三）に「且天子有道、守在海外」（且つ天子に道有れば、守は海外に在り）とあり、薛綜注に「淮南子曰、若天下無道、守在四夷。天下有道、守在海外」（淮南子に曰く、「若し天下に道無くんば、守は四夷に在り。天下に道有らば、守は海外に在り」と）といい、李善注に「鄭玄禮記注曰、道、謂仁義也」（鄭玄禮記注に曰く、「道は、仁義を謂ふなり」と）という。

［卉木］草木。『毛詩』小雅・出車に「春日遲遲、卉木萋萋」（春日遲遲たり、卉木萋萋あり）とあり、毛傳に「卉、草也」（卉は、草なり）という。

［荷］受ける。蒙る。潘岳「寡婦賦」（『文選』巻十六）に「承慶雲之光覆兮、荷君子之惠渥」（慶雲の光覆を承け、君子の惠渥を荷（にな）ふ）とある。

［平分］公平なこと。『楚辭』九辯に「皇天平分四時兮、竊獨悲此廩秋」（皇天 四時を平分するも、竊かに獨り此の廩秋を悲しむ）とある。

７宸襟動時豫　８歳序屬涼氛

［宸襟］天子を指す。六朝以前の用例は未見。唐代には、李敬玄「奉和別越王」（『全唐詩』巻四十四）に「飛蓋迴蘭阪、宸襟佇柏梁」（飛蓋 蘭阪を迴り、宸襟 柏梁に佇む）とあるように、数例見られる。

［動］ややもすれば。いつも。常々。

［時豫］季節の楽しみ。顔延之「秋胡詩」（『文選』巻二十一）に「春來無時豫、秋至恆早寒」（春來るも時の豫しみ無く、秋至れば恆に早に寒し）とあり、李善注に「爾雅曰、豫、樂也」（爾雅に曰く、「豫は、樂なり」と）という。

［歳序］歳月。王僧達「答顔延年」（『文選』巻二十六）に「聿來歳序暄、輕雲出東岑」（聿に來りて歳序は暄（あたた）かに、輕雲 東岑に出づ）とある。

［屬］ちょうど。まさに。その時に当たる。沈約「三月三日率爾成篇」（『文選』巻三十）に「麗日屬元巳、年芳具在斯」（麗日 元巳に屬し、年芳 具に斯に在り）とある。

［涼氛］秋の清涼な気。転じて秋を指す。蕭曄「奉和太子秋晩詩」（『古詩紀』巻六十八）に「涼氛散簟席、露色變林叢」（涼氛 簟席に散じ、露色 林叢に變ず）とある。

９城霞旦晃朗　10 槐霧曉氤氳

＊「旦」、『文苑』は「朝」に作る。「氤」、『文苑』は「氛」に作る。

［城霞］城の上に広がる霞。王融「四色詠」（『古詩紀』巻五十七）に「赤如城霞起、青如松霧澈」（赤きこと城霞の起こるが如く、青きごと松霧の澈するが如し）

とある。
［晃朗］明らかなさま。潘岳「秋興賦」（『文選』巻十三）に「天晃朗以彌高兮、日悠陽而浸微」（天 晃朗として以て彌いよ高く、日 悠陽として 浸(やうや)く微なり）とあり、李善注に「言秋日天氣高朗。晃朗、明貌」（秋日 天氣 高朗なるを言ふ。晃朗は、明なる貌なり）という。
［槐霧］槐にかかる霧。この用例は未見だが、謝莊「宋孝武宣貴妃誄」（『文選』巻五十七）に「鏘楚挽於槐風、喝邊簫於松霧」（楚挽を槐風に鏘し、邊簫を松霧に喝す）と、「槐風」「松霧」の語が見られる。
［氤氳］気の盛んなさま。沈約「芳樹」（『樂府詩集』巻十七）に「氤氳非一香、參差多異色」（氤氳として一香に非ず、參差として異色多し）とある。

11 鸞輿和八襲　12 鳳駕啓千羣

＊「輿和」、『藝文』は「和馳」に作る。「啓」、『文苑』は「起」に作る。
［鸞輿］天子の車。曹植「文帝誄」（『三國志』魏書・文帝紀注）に「鸞輿幽藹、龍旂太常、爰迄太廟、鍾鼓鍠鍠」（鸞輿 幽藹として、龍旂太常、爰に太廟に 迄(いた)り、鍾鼓 鍠鍠たり）とある。『藝文類聚』は「鸞和」に作るが、これは車につけられた鈴を指す。『禮記』玉藻に「故君子、在車則聞鸞和之聲、行則鳴佩玉」（故に君子、車に在れば則ち鸞和の聲を聞き、行けば則ち佩玉を鳴らす）とある。
［和］おだやか。やわらげる。
［八襲］八重に同じ。宮中の門のさま。張協「七命」（『文選』巻三十五）に「應門八襲、琁臺九重」（應門 八襲にして、琁臺 九重なり）とあり、李善注に「郭璞爾雅注曰、襲、猶重也」（郭璞爾雅注に曰く、「襲は、猶ほ重のごときなり」と）という。
［鳳駕］天子の車。揚雄「河東賦」（『漢書』本傳）に「於是命羣臣、齊法服、整靈輿、乃撫翠鳳之駕、六先景之乘」（是に於いて羣臣に命じ、法服を齊へ、靈輿を整へ、乃ち翠鳳の駕を撫し、先景の乘を六にす）とあり、顔師古注に「翠鳳之駕、天子所乘車、爲鳳形而飾以翠羽也」（翠鳳の駕は、天子の乘る所の車、鳳形を爲して飾るに翠羽を以てするなり）という。
［啓］ひらく。先導する。『毛詩』小雅・六月に「元戎十乘、以先啓行」（元戎十乘、以て先づ行を啓く）。
［千羣］騎馬などの非常に数の多いこと。陳琳「爲袁紹檄豫州」（『文選』巻四十四）に「長戟百萬、胡騎千羣、奮中黄育獲之士、騁良弓勁弩之勢」（長戟は百萬、胡騎は千羣、中黄育獲の士を奮ひ、良弓勁弩の勢を騁す）とある

13 羽觴懽湛露　14 佾舞奏承雲

＊「懽」、『藝文』『初學』は「歌」に作る。

［羽觴］羽のついた杯。「２輕薄篇」の「酌羽」注を参照。

［湛露］豊かな露。諸侯が天子の恩徳に浴すことに喩える。『毛詩』小雅･湛露に「湛湛露斯、匪陽不晞。厭厭夜飲、不醉無歸」（湛湛たる露は、陽に匪ずんば晞かず。厭厭たる夜飲は、醉はずんば歸る無かれ）とある。

［佾舞］八佾の舞。天子の舞をいう。『禮記』祭統に「八佾以舞大夏、此天子之樂也」（八佾して以て大夏を舞ふ、此れ天子の樂なり）とある。また『論語』八佾に「孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也」（孔子 季氏を謂ふ、八佾 庭に舞はす、是を忍ぶ可くんば、孰か忍ぶ可からざらんと）とあり、馬融注に「佾、列也。天子八佾、諸侯六、卿大夫四、士二。八人爲列、八八六十四人」（佾は、列なり。天子は八佾、諸侯は六、卿大夫は四、士は二。八人にて列を爲し、八八 六十四人なり）という。

［承雲］楽曲の名。黄帝の楽であるという。『楚辭』遠遊に「張咸池奏承雲兮、二女御九韶歌」（咸池を張り承雲を奏し、二女 御して九韶を歌ふ）とあり、王逸注に「承雲即雲門、黄帝樂也」（承雲は即ち雲門、黄帝の樂なり）という。

15 禁林終宴晩　16 華池物色曛

［禁林］禁苑の林。班固「西都賦」（『文選』巻一）に「毛羣内闐、飛羽上覆、接翼側足、集禁林而屯聚。（毛羣 内に闐（み）ち、飛羽 上に覆ひ、翼を接して足を側て、禁林に集まりて屯聚す）とある。

［終宴］宴を終える。曹植「公讌詩」（『文選』巻二十）に「公子敬愛客、終宴不知疲」（公子 客を敬愛し、宴を終ふるまで疲れを知らず）とある。

［華池］美しい池。江淹「雜體詩･魏文帝遊宴」（『文選』巻三一）に「置酒坐飛閣、逍遙臨華池」（置酒して飛閣に坐し、逍遙として華池に臨む）とあり、李善注に「魏文帝東門行曰、朝游高臺側、夕宴華池陰」（魏文帝の東門行に曰く、「朝に高臺の側に游び、夕に華池の陰に宴す」と）という。

［物色］風物景色。顔延之「秋胡詩」（『文選』巻二十）に「日暮行采歸、物色桑榆時」（日暮に行ゆく采りて歸らん、物色 桑榆の時なり）とあり、李善注に「物色桑榆、言日晩也」（物色桑榆とは、日の晩るるを言ふなり）という。

［曛］くらい。夕暮れをいう。謝靈運「酬從弟惠連」（『文選』巻二十五）に「夕慮曉月流、朝忌曛日馳」（夕に曉月の流るるを慮り、朝に曛日の馳するを忌む）とあり、李善注に「王逸楚辭注曰、曛、黄昏時也」（王逸楚辭注に曰く、「曛は、黄昏の時なり」と）という。

17 疏樹飜高葉　18 寒流聚細紋

＊「紋」、『藝文』『初學』『文苑』梁詩は「文」に作る。

［疏樹］枝葉の疎らな樹。

［寒流］冷たい川の流れ。謝朓「始出尚書省」（『文選』巻三十）に「邑里向疎蕪、寒流自清泚」（邑里 疎蕪に向かふも、寒流 自ら清泚なり）とある。

［細紋］小さな波紋。

19 晴軒連瑞氣　20 同惹御香芬

＊「同」、『初學』『文苑』は「飛」に作る。また『文苑』はこの二句を篇末に置く。

［晴軒］六朝以前の用例は未見。唐詩では「晴れた軒、窓」の意で用いられるが、ここまで屋外での遊宴の様子が詠われていたことから、ここでは「軒」を車と解す。江淹「別賦」（『文選』巻十六）に「龍馬銀鞍、朱軒繡軸、帳飲東都、送客金谷」（龍馬 銀鞍、朱軒 繡軸、東都に帳飲し、客を金谷に送る）とあり、李善注に「軒、車通稱也」（軒は、車の通稱なり）という。「晴軒」とは、晴れた空の下を進む諸侯の車を指すのではないか。

［瑞氣］瑞祥の気。『晉書』天文志中に「瑞氣、一曰慶雲。若煙非煙、若雲非雲、郁郁紛紛、蕭索輪囷、是謂慶雲、亦曰景雲。此喜氣也、太平之應」（瑞氣、一に慶雲と曰ふ。煙の若く煙に非ず、雲の若く雲に非ず、郁郁紛紛として、蕭索輪囷たり、是れ慶雲と謂ひ、亦た景雲と曰ふ。此の喜氣や、太平の應なり）とある。

［惹］染まる。染みつく。「惹」字、六朝の詩文には未見。

［御香］六朝以前の用例は未見。唐詩では「宮中の香」の意として用いられる。また「惹御香」の例も、岑參「寄左省杜拾遺」（『全唐詩』巻二百）に「曉隨天仗入、暮惹御香歸」（曉に天仗に隨ひて入り、暮に御香を惹きて歸る）、同じく岑參に「送裴侍御趁歲入京」（『全唐詩』巻二百）に「立處聞天語、朝回惹御香」（處に立ちて天語を聞き、朝より回りて御香を惹く）とあり、いずれも宮中の香が衣服に染み付いたことをいう。ここでは先の「瑞氣」の香が、「晴軒」に染みついていることを言うのではないか。

［芬］かおり。かおる。芳しい。揚雄「甘泉賦」（『文選』巻七）に「香芬茀以穹隆兮、擊薄櫨而將榮」（香 芬茀として以て穹隆し、薄櫨を擊ちて榮に將（およ）ぶ）とある。

21 日斜迢遞宇　22 風起嵯峨雲

＊「宇」、『文苑』は「雨」に作る。

［迢遞］広いさま。左思「吳都賦」（『文選』巻五）に「島嶼緜邈、洲渚馮隆。曠瞻迢遞、迥眺冥蒙」（島嶼 緜邈として、洲渚 馮隆たり。曠く瞻れば迢遞として、迥かに眺むれば冥蒙たり）とある。

［嵯峨］高いさま。陸機「前緩聲歌」（『文選』巻二十八）に「長風萬里擧、慶雲鬱嵯峨」（長風 萬里に擧がり、慶雲 鬱として嵯峨たり）とある。

23 運偶參侯服　24 恩洽廁朝聞

［運偶］幸運。巡り合わせ。「運遇」に同じ。向秀「思舊賦」（『文選』巻十六）に「託運遇於領會兮、寄餘命於寸陰」（運遇を領會に託し、餘命を寸陰に寄す）とあり、李善注に「運遇、五行運轉、遇人所遇之吉凶也」（運遇は、五行運轉し、人の遇する所の吉凶に遇ふなり）という。

［侯服］諸侯の服をいう。『漢書』敍傳下に「侯服玉食、敗俗傷化」（侯服玉食して、俗を敗り化を傷ふ）とある。

［恩洽］恩徳があまねく及ぶこと。揚雄「長楊賦」（『文選』巻九）に「蓋聞聖主之養民也、仁霑而恩洽、動不爲身」（蓋し聞く 聖主の民を養ふや、仁霑ひて恩洽く、動くに身の爲にせずと）とある。

［廁］まじわる。潘岳「秋興賦序」（『文選』巻十三）に「攝官承乏、猥廁朝列」（官を攝し乏しきを承け、猥りに朝列に廁る）とある。

［朝聞］朝廷に広く知られること。江淹「張令為太常領國子祭酒詔」（『江文通集彙注』巻八）に「譽洽朝聞、聲緝民聽」（譽は洽く朝に聞こえ、聲は緝（あき）らかに民に聽こゆ）とある。

25 於焉藉多幸　26 歲暮仰遊汾

＊「藉」、『文苑』は「籍」に作る。

［於焉］ここにおいて。『毛詩』小雅・白駒に「所謂伊人、於焉逍遙」（所謂 伊の人、焉に於いて逍遙たり）とある。

［藉］よる。たよる。

［多幸］多くの幸い。顔延之「和謝監靈運」（『文選』巻二十六）に「伊昔遘多幸、秉筆侍兩閨」（伊れ昔 多幸に遘ひ、筆を秉りて兩閨に侍す）とあり、李善注に「左氏傳、羊舌職曰、民之多幸、國之不幸」（左氏傳に、羊舌職曰く、「民の多幸は、國の不幸なり」と）という。

［歲暮］年が暮れる。年の暮れ。「古詩十九首」其十二（『文選』巻二十九）に「四時更變化、歲暮一何速」（四時 更ごも變化し、歲の暮るること一に何ぞ速やかなる）とあり、李善注に「毛詩曰、歲聿云暮」（毛詩に曰く、「歲 聿に云に暮る」と）

という。また年老いることを言う。張協「詠史」（『文選』巻二十一）に「揮金樂當年、歳暮不留儲」（金を揮りて當年を樂しみ、歳の暮れしとき儲を留めず）とあり、李善注に「歳暮、喩年老也」（歳暮は、年の老ゆるを喩ふるなり）という。ここでは両意を含むか。

［遊汾］「汾水游」に同じ。謝靈運「從遊京口北固應詔」（『文選』巻二十二）に「昔聞汾水游、今見塵外鑣」（昔聞く　汾水の游、今見る　塵外の鑣）とある。これは昔、堯帝が汾水のほとりに行幸したことに基づく。『莊子』逍遙遊に「堯治天下之民、平海内之政、往見四子藐姑射之山、汾水之陽、窅然喪其天下焉」（堯　天下の民を治め、海内の政を平らかにし、往きて四子を藐姑射の山、汾水の陽に見、窅然として其の天下を喪へり）とある。